

# 最先端の地域研究者によるエスノグラフィ論特別講義

代表・中川理

大阪大学グローバルコラボレーションセンター

期間2011/9--2012/3

(企画検討のプロセス)

(1) 『エスノグラフィを書く』検討会の実施

7名のメンバーからなる検討会を立ち上げ、10月と2月に講義の実現に向けた検討を行う。

(2) JCAS共同講義調査

東京外国語大学の西井涼子准教授より、本演習の内容に関して意見を聴取する。

(3) 「エスノグラフィを書く」デザイン・ワークショップ/イベント

民俗学者・宮本常一に学ぶエスノグラフィと社会の繋がり

周防大島文化交流センター (3月19日)

各セミナーのテーマ候補について大学院生とディスカッションを行う。

## ■ 「エスノグラフィを書く」(シラバス案)

- 本演習は、今日を代表するエスノグラフィの書き手たちと参加者との対話を通して、人々の生のあり方を記述する方法ととして、エスノグラフィという実験的な試みでも、もともとの「エスノグラフィ」は、文化人類学などがフィールドワークで得た知見を記述する手法であり、研究の方法でもあったわけですが、質的な調査結果をまとめる手法としても、現在では様々な分野、あな調査結果をまとめる手法としても、現在では様々な分野、あなエスノグラフィの世界にも浸透しつつあります。後者のようなエスノグラフィの側面には、住民の視界をむかせるようなソック自問し続けてきた人類学の側から見れば、むしろソックエスノグラフィと社会との接点という面ではひとつの現れといえるでしょう。これまで人類学では、エスノグラフィを書くこととをめぐって、人々の視点をいかに表象するかという自問を続けてきました。本演習では、このような自問を研究者の倫理や書き手の自我の確立の問題とは異なった次元で考え(もちろん、これらも重要な課題ですが)、エスノグラフィは(も)に何をもちたらしめるのか、さらに書き手の自己変革を伴うエスノグラフィを書くことが、書き手と社会の間にどのようなつながりを生み出すのかについて、ともに考えてみたいと思います。
- 本演習は、主にフィールドワークに基づいたエスノグラフィを書くこととしている大学院生を対象としたプログラムです。しかし、研究機関への就職を希望し、博士論文の執筆をめざしている人だけが対象ではありません。エスノグラフィの手法を用いて社会との関わりを何らかのかたちで持とうとしている人で、受講にあわせて「自分自身が思い描くエスノグラフィ」の何頁か分(A4にして5枚程度)を用意できる人ならば、大学院生や一般の方等、どなたでも歓迎いたします(学部生の方には審査があります。下記をご覧ください)。また、エスノグラフィを表現手段として用いることのできる分野であれば専門分野も問いません。
- 本演習は、2012年10月から2013年1月までの週末の午後(第1回のみ全日)を利用して実施される。本演習は地域研究コンソーシアム(JCAS)の共同企画講義として行われ、大阪大学グローバルコラボレーションセンター(GLOCOL)のグローバルコラボレーション科目として実施される他、JCAS加盟組織に所属する大学院生の参加を広く公募する(上限30名)。また演習の効果を最大限にあげるため、一部、合宿形式の採用を検討する。その地域に住む方の参加も歓迎する。